第２回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会　議事録

テーマ　：2050 年の浦和の将来像・コンセプト
開催日時：令和３年１１月２日（火）１４時５０分～１６時００分
開催場所：埼玉会館　小ホール
出席者（敬称略）

氏名	役職	団体名等
隈　　研吾	会長	建築家
安藤　　梢		三菱重工浦和レッズレディース選手
市川　　淳平		さいたま市浦和商店会連合会　副会長
坂井　　貴文		埼玉大学学長
田口　　裕基		株式会社三越伊勢丹 執行役員　伊勢丹浦和店長
鳥羽　　三男		東日本旅客鉄道株式会社　浦和駅長
廣瀬　　通孝		東京大学名誉教授
向井　　亜紀		タレント
安河内　眞美		古美術鑑定士
清水　　勇人	座長（司会進行）	

議事録：

司会

皆様お待たせいたしました。只今より第２部 第２回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会を開催いたします。今年 8 月 28 日に第 1 回目の浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会が開催され、今回引き続き委員としてご参加いただく９名の有識者の皆様をご紹介いたします。建築家の隈研吾様、三菱重工 浦和レッズレディース選手の安藤梢

様、埼玉大学学長の坂井貴文様、東京大学名誉教授の廣瀬通孝様、タレントの向井亜紀様、古美術鑑定士の安河内眞美様、さいたま市浦和商店会連合会副会長の市川淳平様、株式会社三越伊勢丹執行役員　伊勢丹浦和店長の田口裕基様、東日本旅客鉄道株式会社　浦和駅長の鳥羽三男様
そして進行役を務めるのは、さいたま市長の清水勇人です。皆様どうぞご登壇ください。なお、浦和レッズレディース選手の安藤様と東京大学名誉教授の廣瀬様はオンラインでのご参加となります。ここからはさいたま市長の清水勇人に進行をお願いします。皆様それではどうぞよろしくお願いいたします。

清水市長
さいたま市長の清水勇人でございます。それでは第２回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョンの有識者懇話会を開会したいと思います。前半のシンポジウムでは本市都心の未来、コロナ後のまちづくりについて大変貴重な講演をいただきました。私自身が印象に残ったのは、一つはデザインということですね。デザインの大切さ、特にモダンなデザインというよりは人間の視点にあったデザインであるとか、あるいはこれからの時代を考えた時に少子化・高齢化を意識してより子ども、あるいは高齢者への視点をしっかり持った都市計画にしていく、まちづくりにしていくということであったり、あるいはもう一つの視点がデジタル化という視点ですね、このデジタルツインを想像しながら考えてみました。本当にワクワクするようなことでありましたけれども、そういったことを活用してこのまちづくりに活かしていくということが大変印象に残りましてさいたま市、多様な都市が四つ合併してできた都市なので、それぞれ面白いデザインコードを持ちながら、多様性を意識して全体として何か大きなコンセプトがあってまちづくりをしていく、デザインのコンセプトみたいにしていくというのもいることなのかなってちょっと個人的には感想を持ったところでございます。隈会長、それから水村様、また平野様に改めて御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。また隈会長におかれましては長時間となりますが引き続きよろしくお願いいたします。さて８月 28 日に開催をいたしました第１回懇話会では、「2050 年に浦和が目指すまちづくりとは」をテーマとして、委員の皆様から魅力や価値について大変貴重なご意見あるいは提案をいただきました。内容につきましては、本日の委員の皆様や傍聴の皆様のお手元にお配りしております、まちづくりニュースレター第 2 号の 1 ページまた、2 ページを抜粋して整理をしておりますのでご覧いただきたいと思います。そして本日のテーマは、2050 年の浦和の将来像コンセプトでございます。先ほど紹介した第１回懇話会でいただいたご意見、キーワード、考え方などをもとに市役所内部のプロジェクトチームで整理した概要をですね同じくまちづくりニュースレターの 3 ページ、それから 4 ページに整理をしております。本日は第１回懇話会でいただきましたご意見を振り返りながら、委員の皆様のご専門を中心に様々なご意見、ご提案をいただきたいと思います。まずは隈会長から第 1 回の懇話会では駅が浦和のコミュニティにとって重要な場所である、また駅周

辺のリ・デザインが重要なテーマであるといったご意見を頂戴しました。また先ほどのシンポジウムで都心の未来、あるいは都心の一つである浦和のまちの未来に通じるご講演をいただいたところでございますが、これから浦和のまちの９つの分野とコンセプトについて、隈会長はどのようにお考えかということでお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

隈会長

第 1 回では駅のお話が出ました。駅はですねこれから都市コンパクトシティですとか、ウォーカブルな都市っていうときに一番重要な要素が駅と、駅の周りのエリアのデザインなんですね。だいたい 20 世紀のまちは駅っていうものをですね軽視して、交通が何しろ捌けなきゃいけない、交通がもちろん捌けなきゃいけないわけですけれども、それに対してですね、それだけじゃなくて、どういうふうにしてまちのアイデンティティを作るか、そのまちのアイデンティティっていうのが先ほども市長からデザインコードの話が出ましたけれども、そもそも 4 つの違うキャラクターを持っている場所が合体したものなので、それぞれのキャラクターがなくなるというのは私非常に残念だなと思います。それぞれのキャラクターが残るようなデザインコードというものをですね、これからうまい形で作れたらばですね、さいたま市が合併してなおかつキャラクターが残っている。さいたま市という大きなまとまりがあるけれども、それぞれの所に行くとちゃんとキャラクターが立っているっていうそういう感じができたらいいなというふうに思っています。そういうものが物のひとつとして、やはりまちと文化とまちづくりをどう繋げていくかっていうのがこれからテーマになっていって、単に人口が多いのがいいまちではなくて、それから建築がただ立派なのがいいまちではなくて、やっぱり文化っていうものと、それからまちづくりが関連していなきゃいけない、その関連の仕方みたいな事をこういう場所で論議していったらいいなというふうに思います。文化とまちづくりっていうのはですね、今までどう繋げようかっていうときに、単なる美術館作れば文化的なまちになるっていうのは非常に単純な考え方が多かったんですけど、私はそういう時代はもう終わったというふうに思っていて、文化というのはそれぞれの場所の人たちが築いてきた文化で、そういうものがちゃんとまちに感じられて、そういうものがまちを歩いているだけでそういうものに浸ることができるようなまちづくりにすればどういうのがいいかみたいなことを世界で今どのまちでもそれが主要なテーマになっていて、もう大きなハコとしての美術館作るのは終わりだって、それ世界中もだいたいそういう感じの空気なんですね。そういう中で浦和、さいたまの部分っていうのはですね、やはり僕は非常に文化の根が深い面白い場所だと思っていまして、そういうものをうまい形で磨いていくみたいなことができればと思っております。

清水市長

ありがとうございました。隈会長のご意見で、９つの分野における浦和の町が目指すコンセ

プトの考え方が明確になってきたような気がします。それでは続きまして、今お話がありました文化芸術の視点から安河内委員から、第１回の懇話会では浦和は文化教育の土台があり、素晴らしいというご意見をいただきました。また区民の意識も高い、教育の場でより美術を学ぶべきだとまた美術が身近に感じられる環境づくりが必要である、また若い家族が楽しめるスポーツ、アートのバランスの取れた歩きやすいまちが理想といったご意見を頂戴しております。文化また教育に関するコンセプト、またご専門の文化分野以外のコンセプトへのご意見もぜひ頂戴したいと思いますけれども安河内委員いかがでしょうか？

安河内委員

前回ですね教育の場でもっと日本の美術を学べるといいなというふうなお話をさせていただいたんですけれども、日本の美術を小学生の頃から見たり学んだりすることで、日本文化の素晴らしさを身近に感じてもらえるのではないか、日本を知って日本人であることの誇りをもっと持ってほしいということなんですね。やはり先ほど水村先生からもお話があったように、受験科目以外の心の教育というんでしょうか、そういった面を非常に小さい頃からあるといいのではないかなという気持ちがいたします。それはそれとして、実際のところを文化とか美術、特に日本美術に興味を持たれるのはシニア世代になってからなんです。鑑定団でもやはりそういう方を多く見るような気がいたします。そうした年配者が学べる場を広げていけたらいいのではないかなという気がいたします。もうやっていらっしゃるかもしれないんですけれども、大学でシニアが聴講できたり、交流できたりという場があるといいのではないかなと思います。若い世代に人気のあるまちというふうに浦和のことを聞いておりますけれども、シニア世代にも魅力のあるまちづくりをと思っております。そのためには隈会長のおっしゃる人中心のまち、人が歩けるまち、歩くことが楽しいまちであることが必要だと思います。今日も駅から歩いてまいりましたけれども、やはりちょっとどちらかというと車を中心にした感覚があるんだろうなと年配者が歩くにしてもちょっと狭かったり、道がまだ整備されてなかったりというふうな感覚がいたしました。浦和には中山道の一部が通っているというふうなことがございます。先週の土曜日に私自身友人と中山道を歩き始めまして、前回は日本橋から板橋本町まで歩きました。ほとんどはビルとか高速道路の間を歩くような感覚なんですけれども、最後に板橋宿の旧中山道を歩いていてものすごくほっとしたんですね。旧街道の町並みが人間らしさを感じさせてくれたんだと思います。明日は板橋本町から浦和まで歩くつもりなんですけれども、デジタルを使ったまちづくりということで先ほどの第 1 部でもお話がございました。すごく個人的な希望ではありますけれども、浦和の中山道を歩くときに江戸時代の中山道、そういったものを感じられるバーチャル体験とかいうのがあったらもっと楽しいのではないかなと思いました。歩きながら若い人もシニア世代も、史跡あるいは美術のポイントめぐりができるまちになるととても浦和に来たい気持ちがまた強まるのではないかなと思います。バーチャルで旧中山道、そしてそこにある本陣屋敷の中に屏風があったり、掛け軸があったりそういったものがどうい

うふうに使われ、蝋燭の明かりで見るそういったものがどういうふうに見えるのかとか、そういうところに興味が私自身はとてもございましてそういう部分を作っていっていただけるとありがたいと思います。

清水市長
はい、ありがとうございました。それでは続きまして坂井委員にお伺いしたいと思いますけども、坂井委員からは前回、文教都市浦和は明治大正期に作られたものである。当時は学生、教員が多く町にいたと。また今後もこの学校機能の強化は不可欠だと、人生 100 年時代の教育の発信拠点となると良い。こういったご意見を頂戴しました。このような観点から教育また県と行政に関するコンセプトを中心に坂井委員からまたご意見頂戴をしたいと思います、いかがでしょうか。

坂井委員
前回この有識者懇話会で浦和が文教都市として発展をしてきた歴史について簡単に紹介をさせていただきました。この文教都市というキーワードなんですけれども、浦和が文教都市であるというイメージ非常によく定着をしております。文教都市というのもこれもなかなかユニークでありまして、これ簡単に文教都市を名乗ることもできないし、またイメージをつけることもできないのだと思います。そういう意味でこの文教都市というのはひとつ浦和をですね、他の都市と差別化できる非常に貴重な財産であろうというふうに思っております。今後もこの方向を大事にしていくことが必要なんだろうというふうに思います。でも具体的なこととしては一つの方向としては現在の小中高ですね。非常に優秀な学校があるわけでありますが、この学校を維持発展させること、それで魅力的な教育環境を提供していくということが必要だろうというふうに思います。これによって子供とか若者、それから親を引き付けていくということが大事だろうと思います。ただ今あるものを維持するだけではなくて新しい方向を加えるということも極めて大事なことであります。新たな魅力といたしまして人生 100 年時代ということが言われておりました。我々働くことのできる時間が長くなる。逆に言うと働かなきゃいけなくなるということなのかもしれませんが、そういう時代でですね、これからの時代、非常にまたすべてのものが早くなってくるだろうと、技術革新は進みますし、様々な組織も変わっていくだろうと、そういう中で新しい技術を取り入れていくということがまさに大事です。そのためにリカレント教育とかあるいはリスキリング教育と言うようなもの、またさまざまな教養的な講座、こういうものを提供できる場が浦和であるならばできるのではないかなというふうに思っております。生涯学び続けて成長できる浦和のまちをつくることによって、ここに住む人たちだけでなく近隣の人たちも併せてですね、自己実現を図って幸せを感じられるようなまちができるのではないかというふうに思っているところです。一方、文教都市というキーワードに加えて 20 年 30 年先を考えると新たな創造改革の地としての浦和を考える必要があるのではないかというふ

うにも思っております。浦和はよく言われますように、緑が非常に多くて落ち着いたまちで住みやすいと、住むのに非常に適したまちであるということもありますけども、違う観点で見るならば東京に非常に近くて交通の便も大変よろしい。また近くに多くの大学や企業もあると、このようなことは新たな知の創造を可能にするポテンシャルを持ってると言うふうに思っております。この利点を活用して、例えばヘルスケアに特化した先進研究機能を持つ都市として、そういう顔を持つことができればグローバルな研究者や学生たちが集まってまちとしての活気も出てくるのではないかなと、それとともに新たな学術の発信拠点になるということも可能なのではないかと思っております。将来現在の市役所が移転をするというふうに聞いております。ご承知のように今の市役所の場所というのは以前埼玉師範学校がございました。日本サッカーの発祥の地でもあります。ここでは以前より教員が養成されるとともに学問や文化の発信拠点でした。こういう歴史を考えても新たな庁舎には文化芸術や趣味の交流の場としての機能というものは当然入るんでしょうけども、それに加えましてですね、教育先進研究を行えるような機能も付加することができるならばさらに浦和の魅力を上げられるのではないかというふうに思っております。生涯学び続けられる文教都市、また先進研究機能を併せもつ学術都市、こういうことが可能なのが浦和なのではないかなというふうに思っているところであります。以上です。

清水市長

はい、ありがとうございました。それでは続きましてスポーツの視点で安藤委員からご意見を頂戴したいと思います。前回はサッカーの試合が行われる日はまちが真っ赤に染まる。海外のクラブのようにサッカーがまちに染みついたそんな場所だというご意見をいただきました。またスポーツを通じたコミュニティ形成が大変重要である。こういったご意見も頂戴をしたところでございます。まさにサッカーのまち、浦和の強み、スポーツとしておりますけれども、そのコンセプトとしてこれからのまちづくりにどんな視点で作っていったらいいか。安藤委員いかがでしょうか。

安藤委員（リモート参加）

はい、よろしくお願いします。私自身は 10 年くらい浦和レッズでプレーさせてもらっているんですけど、本当に選手としてプレーしていて日本一のサポーターの前でプレーできるということはすごく誇らしく感じていて、また他のクラブの選手たちに、よくあれだけの一丸となったサポーターの中でサッカーができるということを一度でいいからそんな中でプレーしてみたいっていうことをいつもうらやましがられたりしています。また ACL で浦和レッズはチャンピオンになっていますが、私がドイツでプレーしていた時にドイツ人に J リーグのクラブで知っているクラブがあるかっていうことを聞くと、必ず 1 チームで浦和レッズという答えが返ってきていました。本当に世界にも浦和ということはサッカーを通してアピールできることだと感じています。あとですね、スポーツを通してまちのみんなが一

緒になって喜び合ったり、負けの悔しさを味わったりとかそうすることで一つになることができて、そこから湧き出るエネルギーっていうのはすごいエネルギーがまちに生み出されると感じています。前回、向井さんがちょっと熱狂的で怖いイメージがあるところもあるということもおっしゃられていましたが、これから子どもから高齢者まで安全に暮らしの中でいろんな形で地元のスポーツクラブを応援できるような場所がたくさん増えていくといいなと感じています。例えば女性も試合を観戦できるようなおしゃれなカフェでもスポーツ観戦ができたりとか、子供や高齢者が公園で遊んでいる途中にパブリックビューイングなどで公園でもそんな風にして試合観戦ができるような場所があってもいいのかなと感じています。あとスポーツの関わり方には、する・みる・ささえるとありますが、サッカーを見て自分も何か体を動かしたいと思ってスポーツとか運動を始めたりとか、また選手やクラブを支えたいと思って、そういった方たちが集まってコミュニティができていくと思います。そういった方たちが活動しやすい場所を増やしていってもらうことでスポーツを通して幸せで生き生きとした日本一元気なまちづくりを目指していくことができるんじゃないかなと感じています。以上です。

清水市長

はい、ありがとうございました。続きまして廣瀬委員からご意見を頂戴したいと思いますが、廣瀬委員には前回リモートがキーワードだと、もしもの時のためにバーチャルを備え活動を止めないことが重要だ。今後はバーチャル空間や情報のまちの基盤に備えていくこと、また先程の話がありましたようにデジタルツインという取り組みが重要じゃないかといったご意見をいただきました。情報の分野は各テーマをつなぎ、またまちそのものをアップデートし続け、全体のスパイラルアップを図るものとして新技術活用分野としておりますけれども、こういったデジタル化などを含めましてこのまちづくりと情報という視点で廣瀬委員ご意見を頂戴したいと思います、いかがでしょうか。

廣瀬委員（リモート参加）

はい、大変よくまとめていただいたと思っております。すみません。立場上、リモートと言っちゃった手前今日はリモートで失礼いたします。今言っていただいたようにデジタルツインの役割というのは、2 つあると思うんですよね。ひとつは前回ちょっといろいろお話ししましたけども、活動を止めないためのある種の救命ボートとしての役割っていうのが一つあると思います。もうひとつはやっぱり世の中をより活性化するため、今日平野先生なんかのお話も大変興味深くお聞きしましたけれども、ある種第 2 の空間としてフロンティアの場を提供するということじゃないかなというふうに思います。今日はどちらかというと後者のお話を少しさせていただこうかなというふうに思っています。それはまちの基盤としてのデジタルツインということの復習になるわけですけれども、今日非常に平野先生うまくご説明いただきましたけれども、さらにちょっと追加していいますと、何か難しいこと

を言っているわけではなくて、もうすでに我々リアルの平野先生フィジカルとおっしゃいましたけれども、そういう世界と重ね合わせる形でサイバーの世界であるとかデジタルの世界っていうのも体験しているんですよね。例えば商店街で言えばお店の方たちというのはすでにホームページを持っていて、そこで通販のページなんかで通販行っているかもしれません。ネット通販なんかを行っているかもしれません。浦和の町並みのそのウンチクを語るのがすごく好きな人たちっていうのは先ほどの文化の話もありましたけれども、そういう方たちはブログのページの中にいろんな情報をもうすでに書き込まれているんだと思うんですよね。それから今まさにこういうふうなことでやっておられるようにその在宅勤務のためのリモートの環境みたいなものもたくさん存在しているわけだと思います。だからそういう意味ではもうサイバーワールド、現実にも存在しているということだと思います。ちなみに今日は非常に面白いことがあったのは、僕実は東京大学のすぐそばに住んでいるんですけども、朝爆発音がしまして近くに住んでいるんだけど何が起こったかよくわからないんですね。それでその Twitter を見てみましたら、どうやらどこかでガスボンベが爆発したらしい。それで弥生の交番というのは東大キャンパスの角にあるんですけども、そこでどうやら消防車が集まっているようであるっていうのがこれはもう 2 分後にですね、どなたかが Twitter に上げているんですね。そういう意味では防災なんかにもこういうデジタル世界というものがそのリアルの世界の中に入ってくると非常にいいということが実感できるわけであります。でですね、こういう 2050 年ぐらいになるとおそらくこういった情報的な世界がますます進展していくことになると思いますので、存在感フィジカルなものとデジタルなものというもののバランスがだいぶ変わってくるんじゃないかってことが予想はされるわけですね。それでこれからですね問題なのはこういった情報を世界が今、バラバラにそのネットワークの中に散らばっているってことだと思います。隈先生がおっしゃったように 20 世紀の建築基準法の話をされていましたけれども、これはサイバー世界の中だとまだ建築基準法がないというような状況で、本当にバラバラにカオスな状態で散らばっているそういう状況だと思います。そういったものを何かの形でデジタルツインっていうのは浦和という形で何かの形でサイバーワールドの中にまとめていくってことなんではないかなというふうに思います。こういう情報的な空間のことを「メタバース」という全く横文字ばっかり使って申し訳ないんですけども、そういう呼び名をする場合があります。ここが最近非常に熱くなっておりましてですね、そのフィジカルな空間に加えてメタバース空間というものをフィジカルの空間がどれだけきちんと持つかということが重要だというふうに言われています。ここはまさにいろんな産業がこうお金儲けといったら変ですけれども、そういうところとちょっと関係してくるものですから、例えば GAFA の一員である Facebook という会社が最近取りざたされておりますけれども、そういう会社はそういうところを中心になってビジネスを展開していこうということですね。いろんなことを始めているということも聞きますし、Facebook という会社の名前自身もメタという名前に変えるそうでありますけれども、何かそういう非常に熱い場所であるということは間違いないこ

とであると思います。それはそのフロンティアっていう意味で言えば若い人もここに集まってくるということになるでしょうし、非常に活気に溢れた浦和を作っていく上でこういうことは考えていかないといけないってことだろうと思います。情報世界の特徴というのは 2 つあって、いくらでもその細かいところまで突っ込んでいける非常にオタッキーなブログなんかに象徴されるみたいな、すごく細かいところまで対応できるっていうのがその情報っていう技術の特徴だと思います。バーチャルな店舗というのはリアルな店舗よりはるかに細かい品ぞろえが可能だ、みたいなところがそれにあたる。それからもうひとつは水村さんがお話されたように高齢化社会においては外へ出られないって問題が非常に出てくるので、情報を使うと在宅をベースとしたいろんな新しい住まい方ってのが可能になってきますから、こういう点でもすごくいいんじゃないかなというふうに思います。僕は半分冗談で、明るい寝たきり生活って言っていますけども、そういうその新しい高齢者の住まい方というもののモデルになるんじゃないかというふうにも言えると思います。しかしその一方でともすると、ネットワークの世界というのは全世帯無国籍という状況にもなるんですね。だから今ここで議論されているような浦和というエリア自身の特徴をどうやって出していくかということをよっぽどちゃんと考えないと、本当に何かもう無国籍の変なよくわからない空間というのを作ってしまうことになるので、その辺きちんと最初から考えていくということがまさに重要なことなのかなというふうに思います。ちょっと具体的なことを一番最後に申し上げるとですね。例えばさっきおっしゃっていたように情報技術というのは時間軸を行ったり来たりすごく簡単にできるので、先程の浦和の過去を見るなんていうのはまち歩きしながらこういうのは AR 技術といいますか、オーギュメンテッドリアリティ。拡張現実の技術といいますか、そういうやつを使うと過去をのぞきながらそのスコープをオペラグラスみたいなやつ首からかけながらですね、非常に楽しいまち歩きができるなんてこともできるかもしれませんし、それからパリからもしかすると浦和商店街にジャックインするみたいな、そういうメタバースを作っていくなんてことも可能だと思いますし、具体論としてはいろいろなものを企画していくということができるかなというふうに思っております。おそらくこういったものというのは歴史的にいうと昔の明治時代の鉄道引くか引かないかみたいなそういう話だったと思いますので、2050 年ぐらいのことを考えるんであれば、こういったものっていうのをどういうふうにして考えていくかですね。さっきからちょっと言ってますけれども情報技術ってのは間違った使い方をすると非常に悪魔になってしまいますので、天使にもなる悪魔にもなるっていうのはこういうふうな技術をどういうふうにこうきちんと消化して浦和っていうまちの中に定着させていくかということが重要かなというふうに思います。どうもありがとうございました。

清水市長

廣瀬先生ありがとうございました。続きまして、浦和のまちを内側と外側から見てこられました向井委員からご意見いただきたいと思いますが、前回のんびりゆっくりしっかりと浦

和の良さを継承しながら発展してほしいそういったご意見をいただきましたり、あるいは親子三世代のまち歩きから共に新たなまちを築けるような新たな文化を育むようなまちにしたい。また浦和のまちの伸ばしたい部分や残したい部分としてほっとできる景色、また懐かしさノスタルジーを感じられる空間がある。といったご意見をいただきました。浦和のまちに備えるべきテーマとして緑、景観といった分野であるとかあるいは商業業務として整理をしておりますけれども、向井委員からさらにそういった視点からご意見を頂戴したいと思います。いかがでしょうか？

向井委員

はい、よろしくお願いします。まず安藤さん、ごめんね。浦和レッズ 1990 年代、レッズが本当に浦和のまちで真っ赤にスタートした時はちょっとね、愛が濃すぎて怖いような感じがあったんですけれども、でも浦和っていうのはそれこそ文化のまちって言われるだけあって老若男女が心が柔らかい部分があって、そのちょっと怖いかなって思うレッズの文化をしっかり今呑み込んでいるなと思って、本当にレッズの試合になるとおじちゃまおばあちゃまはもう本当にですね、赤いお洋服を着てお出かけしたりして、そういう何て言うでしょうこう、いろんな種類のいろんな温度の人が一つのスタジアムにこう集まっていくっていう文化が浦和だからこそ根付いたなっていうパワーを今は感じています。さて私は浦和でずっと過ごして高校時代、それから本当に長く長く友達と会うっていうとやっぱり浦和に集まって、浦和第一女子高校の同窓会をするっていうとパインズホテルに集まってみたいなことをずっとやってきたので浦和との距離っていうのが遠くなったり近くなったりしながらこのまちを本当に自分なりに濃い愛で見てきたんですけれども、今浦和ガチャってあるんですね。すごいですね。私、伊勢丹とコルソが欲しいです。でレッズも欲しいです。他に何があるかなって思って調べたら娘々がありました。あの濃いラーメン屋さんですよね。兄が浦和高校なんで、お前娘々を食べろって言って連れていってもらったことがあるんですけど、娘々が元気でね浦和ガチャに含まれているってのを聞いて本当にうれしくなりました。やっぱり文化っていうのは難しく考える必要はないと思います。愛着とか懐かしいなまた行きたいな。うわあ大好きずっと濃く、思ってなくてもパッと思い出した時に、はぁって心が触れればそれは本当に私たちの心に浦和っていう文化ちゃんと根っこを生やしているっていうことなんじゃないかなと思います。私、旅の番組「朝だ生です旅サラダ」っていう番組を 30 年やっているんです。初めてあの番組に出た時に私 20 代でした。前髪あげていました。もう本当イケイケでした。でもそんな時からずっと旅番組をやっていてこの間も言ったんですけれども、あの番組何千回もやっている中で一番旅の目的地として紹介されてこなかった県は埼玉県です。本当に全然紹介されないです。たまに川越、たまに秩父っていう感じなんですね。でもね、だからこそ私たちが自分たちのまちに愛着を持たなかったらもったいないですよね。この愛着っていう部分で緑とか居住スペース、使いやすさ移動とかね文化とかそういうことを考えていたときに素人ながら思ったのは文化って追い詰めら

れない自分で得られる場所を持っているかどうかみたいなところにすごく強く繋がっているんじゃないかなと思います。「旅サラダ」で長くご一緒している神田正輝さんがたぶん女の子を口説くときに使っている言葉だと思うんですけれども、目を閉じて心の中に映る風景を 3 つ思い浮かべてみて。その3つがあなたにとってとても大事なことだよ。もし自分がつらくなったり、孤独になったり、病気で苦しんだりしたときにその 3 つの景色を思い出せたら体はまたそこに行きたいな。そこでまた友達に会いたいな。あそこの風景の中で深呼吸したいなっていう方向に向けて素直に歩き出すよ。口説かれそうになりますよね。でも皆さんも今ちょうどいいと思います。コロナでいろんなところに行きたいところに行けない時間をたくさん味わいました。そんな時に目を閉じて、あぁ、私が大好きな、胸の印画紙に焼き付いているような、いつもいつもふっと思い出すようなそんな景色は何かな。いくつあるかな、まだ1個しかない。じゃあ、あと2つはこれから探すんだな。これから浦和に作るんだな。そんな風に思えば立派な景色じゃなくていいんです。そういう景色が浦和に作れるかなっていうのを、1つの大事なコンセプトにして、老若男女がみんなで同じように胸の中に、胸の印画紙に焼き付けられるような、元気が出るような、自分を追い詰めるようなものから、解放されるような景色が出来て欲しいなと思います。うちの兄にとってはそれが実は娘々だったりするんですね。私にとっては一女に向かって歩いていくあひる坂、この間久しぶりに行ったらもう泣きそうになりました。なんかね夢がいっぱいあって、でも将来の不安もいっぱいあってどうしようって思いながら、毎日学校に向かって歩いていた時の自分が蘇ってきて、よし人生 100 年、あと半分頑張るぞって思ったんですよね。だから皆さんも浦和っていうまちにカッコいい景色じゃなくていいんです、坂道だけでもいいし、ラーメン屋さんの古びた暖簾でもいいし、なんかそういうものがあったらいいな。すごく偉い教授の人とかすごく偉い建築家の人とか、もちろん味方に巻き込んで私たち素人の浦和愛っていうのをどんどん残して、そして残ってなくてもいいんです。自分たちで作っていけたらいいなっていうのを思いながら、ちょっとね浦和の思い出をいろいろたぐってみました。浦和っていうまちは無理せず、自分でいられる場所になって欲しいなと思います。今、私達一番無理しているのは、子育てとかね、辛い職場でも絶対に辞められない仕事とかね、親がだんだんだんだん記憶力を失って解けていくのを目の当たりにしながら続けなくちゃいけない介護とかね、自分の病気とか、そういうこと皆さん本当に抱えていると思います。でもそういったことを日本人は美学としてちょっと隠しすぎだなって思うんですね。コロナでよくわかりました。辛いのに SOS を出せなかったり、シングルマザーの人が本当にどうしよう家賃、どうしようご飯って思っていても SOS 出すのは図々しいかな、人に迷惑かけるかなっていって我慢しちゃうっていうのがあるっていう事を本当に目の当たりに味わいました。だったら浦和に住んだら、そういう事ちょっと無くなるよ、薄まるよ、そういうまちにどうやったら出来るかなって考えました。先程ほど第 1 部で、病院じゃなくて家で亡くなりたいっていう人が多いっていう話が出たんですけれども、でもその家で、辛い病気と闘う人を介護する家族のことを考えると、もしかしたらこのまち自体が家みたいにどうにかならな

いかな、そう思いました。私の母が亡くなる直前、母は鹿児島の出身だったんですけれども、大宮で長く暮らして、子育ていろんな事、ずっと何十年過ごした人なんですけれども、５０年近く過ごした人なんですよ、それでもやっぱり最後の最後、帰りたくなったのはふるさとでした。桜島が見えるところに行きたいって言って、私母を連れて鹿児島に行きました。そしたら腹水がたまっているぐらい本当にしんどかったのに、景色を見たら元気になりました。お医者さんが奇跡だって言いました。でもうちの母ちゃんの胸の印画紙には桜島が写っていたんですよね。桜島に行ったらあやふやだった記憶がみんなピントを合わせて、私ね、女学生のときに下駄で走ったの。という話が始まって、どんどん元気になっていきました。だから自宅じゃなくても、浦和の景色とか匂いとか窓から遠くに見える別所沼公園の林とかそういうのを見ただけで、ふるさとに帰ってきたな、私が解放できる場所だなっていう風に感じられるようなまちになって欲しいと思います。だから立派なお家を作るよりも、子育てとか介護とか働いている間の子どもの世話を１つの家族でみんなで何か分担しましょうか、得意分野で分担しましょうか、介護のスペシャリスト、子育てのスペシャリスト、すごく優しい家族がわりになってくれる、そうですね教育者だったり、そういった人たちと上手く手分けをして暮らしていける、最後本当にあと数日の命になっても、はあ浦和で、この空気の中でこんな時間が過ごせて良かった。難しいところは病院のお医者さんや看護師さんに預けるけれども、私はふるさとにいる。家と同然のような景色の中にいる。みたいな感じで過ごす事が出来たら、ますます浦和はパワーアップするんじゃないかなと思います。何て言うんでしょう、私も今思い出してみて、何か浦和に懐かしい原風景があるかっていうと意外と無いんです。浦和も私、大宮出身なんですけど大宮も、ここさいたま市の中に残っている景色って探さなくちゃ無いと思うんですね。でも私にとってのふるさとは、あひる坂を上りながら感じたあの胸のドキドキとか、幼なじみに会った時にみんな髪型とか変わりました。ツルっとした友達もたくさんいるんですけれども、その友達の笑い方とか、しゃべり方とか、そういうものが、ああ変わってないって思うのがふるさとになっているので、これから作る事の出来るふるさと文化っていうのもたくさんあるんじゃないかなと思いました。何か長いですよね。もうね愛が溢れちゃっているんで、また後から先生方に質問という形で、思いの丈をぶつけようと思います。ありがとうございました。

清水市長

はい向井さんありがとうございました。もう浦和愛がたくさん詰まっていてですね、本当にありがとうございます。続きまして、さいたま市商店会連合会の活動などを通じまして、浦和のまちの状況を大変よくご存じであります、地元事業者の視点から市川委員より、前回はですね、浦和は居住・住宅のまちだ、浦和では保育所など居住サービス系の施設の需要が非常に高い、商売や生活でのトラブルも少なく安心安全なまちだ。といったご意見をいただきました。市川委員からはですね商業・業務あるいは居住・交通のコンセプトについてご意見いただければと思います。いかがでしょうか。

市川委員

地元浦和商店会連合会の市川です。私からは４項目に分けてお話をさせていただきます。はじめに浦和の人の流れ、回遊についてです。私は浦和のまちの特徴を住宅のまち、また主婦とファミリーのまちと申し上げましたが、これは昼の浦和の顔です。浦和在住の方などは想像出来ると思いますが、昼の人の流れは浦和のまちを伊勢丹コルソから郵便局、銀行街のある中山道を通って、裏門通り沿いにヨーカドーに至る、狭い四角形の中をショッピングしながら回遊しているように見えます。一方朝は、これとは異質でやや無機質な官庁街の顔を見せています。かつて朝７時から９時まで、駅から人の流れを追ったことがあるのですが、埼玉県とさいたま市の職員が各職場に至る最短ルートを黙々と急ぎ足で歩かれています。当然一方通行です。なかでも県立図書館跡に沿った、あの細い路地に大勢の職員が流れ込む様はとてもウォーカブルとは思えません。夕方はこの逆で、帰りを急ぐ職員と夕餉の買い物をする主婦層とが混在する形になります。私の目からは住宅のまちと官庁街の ２ つの顔が二面性を持って存在しているように思います。不動産業の視点から言うのですが、テナントが浦和に新規出店する場合、この朝と昼の人の往来を同質なものと歩行者数で合算して、出店計画を立てて失敗する例があります。私に相談してくれれば失敗しなかったのにと思いますが、浦和のまちづくりには動線の確保について、どちらか一方ではなくこの両方を考慮した方がいいかもしれません。２つ目に別所沼公園周辺です。私は UR の職員時代に見沼区のアーバン未来東大宮の初期住宅供給に関わりました。全く無名の団地をどう印象づけるのか、入居者募集に先立って広告代理店数社に PR 企画のコンペを行いました。驚いた事にほとんどの代理店が当時、葦や雑草が生い茂りいかにも泥水がたまったような調整池に着目し、水辺として整備すれば大きな PR ポイントだと指摘されました。その後多目的遊水地として整備され３０年後、深い緑と桜並木が印象的な散歩道となっています。ここで思うのですが、水辺の整備もまちづくりの１つのポイントではないかということです。まちづくりビジョン対象エリアとその付近の水辺は３つあります。県立ですけれど北浦和駅前の近代美術館、クラシック音楽に合わせて噴水が躍る音楽噴水があります。公園内にはアート作品もあります。２つ目が市民の憩いの場である別所沼公園。３つ目が白幡沼です。この３公園はすでに、常盤緑道と花と緑の散歩道で結ばれているのですが、もっとウォーカブルに整備し、さらに身近な散歩道に出来ないものかと思います。３つ目は安全安心についてです。前回の懇話会では、私は現在も浦和は安心安全なまちであり、今後も安心安全なまちとしての維持発展を希望いたしました。人であれば健康第一、まちであれば安心安全が第一と思うのです。一口に安心安全といっても、防災・交通・防犯など、多角的な視野を持って臨みたいところです。今後もマンション建設が続き、子育て世代の流入がしばらく続くと思われますが、子育て世代にとって安心して子ども達を学校に送り出せることが第一の願いで、その上で良質な教育を受けさせたいと考えていると思います。 ２日前に電車内での凶悪事件がありました。あらためて地域に安心安全を守る必要性を感じました。４つ目ですが新築マンション

に入居する新住民と地元民についてです。今後もマンション建設が続き、新しく浦和の住民となられる方が増えるでしょう。マンション内での住人同士のつながりは今どうなっているのでしょうか。よく言われるように、やや希薄な関係なんでしょうか。ここで興味深い事例を紹介します。高砂小学校の西隣にコスタタワーというマンションがあります。2階まで商業施設で、店舗が数店入るコスタ商店会があります。3階以上はマンションです。この商店会と住人が大変仲が良い。コロナ渦でここ2年中止していますが、毎年8月末頃、協力してお祭りを開いています。まるで高校の学園祭を楽しむかのように、住人と商店会が協力しているのを見て、私は感銘を受けました。実は浦和の多くの商店会は単独で祭りを実施するパワーは今はありません。祭りの担い手を従来の商店会とともに、住民、市民が引き継ごうとしているようにも見えました。これからの浦和のまちの有り様のヒントになるのではないでしょうか。私からは以上です。

清水市長

ありがとうございました。続きまして伊勢丹浦和店長として、地域に密着した商業事業者の観点から、田口委員より前回ですね、浦和駅周辺の人口は過去１０年増加傾向にあり、駅周辺の商業環境としては素晴らしい。浦和は伝統ある落ち着いたまち並みが残っている。といったご意見をいただきました。田口委員からはですね、特に商業・業務のコンセプトについてご意見いただければと思います。

田口委員

伊勢丹浦和店の田口です。いつもありがとうございます。商業事業者としてはですね、このまちがどんな人でにぎわっていくのかという事が将来を考えるときにとても大切だと思っております。これまでの議論からやはり浦和は上質な生活者というのがこのまちの主役なのかなという風に思います。いろんなまちありますけれども観光客で稼いでいくというよりは本当に、生活者としての皆様と一緒にこのまちを盛り上げていく、そういう事が大切なのかなという風に思っております。伊勢丹浦和店と一緒に皆さんとこのまちで過ごしていまして、上質な生活者っていうのが一つのエピソードで、この前の夏のクリアランスセールの初日の開店の時なんですけど、今回コロナなので人が少し少ないだろうなと思っていて、特に行列整理とかポールとか立てないでいたんですが、さすがにやはり開店の直前にはわーっと人が相当集まってきました。ただ不思議なことにですね。お客様は開店の門が開きますと自然と自分たちで行列を作ってですね。正面からうなこちゃん前のところまで、ずっとこうきれいに列を作って、私たち何もしてないんですけどディスタンスを守って、整然と入られていくんですね。百貨店のセールの初日の開店時間にこんなに整然と、しかも大勢のお客さまが入ってくる。こんな百貨店他にないです。私の経験上初めて見ました。本当に驚いたんですけど、まさにこれ浦和のお客様のマナーの良さとそういう上質さ、こういうものが非常に表れているなというふうに思いまして、逆にあの事業者である私たちが非常に高い

緊張感を持ったという風に覚えております。こういった企業のレベルと住民の方々のレベル、この非常に高い緊張感がいい相乗効果を生み出しているのかなというふうに思っております。こういう上質なライフスタイルを展開していただいている浦和の住民の方々にはやはりいろんなライフスタイルに合わせたインフラを整えた今後の商業施設というのが大事になってくるのかなと思います。高い教育水準を期待する生活者のための保育とか教育の支援機能、あるいは毎日の生活に彩りを添える上質な食、もちろんウナギはいうまでもなく、浦和では洋ですね、スイーツがとても有名でございます。こうしたものを働く親世代のライフスタイルに合わせてタイムコンシャスと利便性を重視していく施設というのが大事かなと。その中で上品で華やかな彩りを添えるそういう提供するショッピングの空間というものも私たちとしては一緒に提供していきたいと思っています。ネット社会と言われていますけども、やはりリアルな空間でのショッピングというのは浦和の住民の方々にとってはなくてはならない存在だと私もよくお客様にも言われることでございます。浦和伊勢丹の 40 周年なんですけれども、マスコットキャラクターをつくろうということで 3 つ今候補にあがっているというご紹介をしました。今回一つに選ばれたのでちょっとこれをご紹介して、こんなちょっと小さくて申し訳ないんですけど、うららんっていう名前もつけました。伊勢丹浦和店のマスコットキャラクターでこれからいろいろと出てくると思いますが、お馴染み、おみしりおきいただきたいんですけれどもこれもですね、高砂小学校の児童 170 名が一生懸命描いていただいて、その中からお客様と高砂小学校の児童と私たち従業員とで一つに選ばせていただきました。これ作っている間きっとですね、お母様お父様と児童の方々で伊勢丹浦和店に私たちの絵を出そうとやっぱりこんなに愛着のある伊勢丹浦和店と浦和のまちというのをとっても愛着を感じているということをもう店長として非常に強く受け止めた状況でございます。こうした商業施設の中にある皆さん過ごすようなくつろぎのレストランとかカフェとか、あるいは店内を安心安全に歩ける店づくりあるいはデジタル化された 24 時間例えば対応できる行政サービスなども入っていると非常に生活者としても利便性の高いものになるのかなと思います。今、目標に掲げている 2050 年に見据えたまちづくりですとおそらく駅前は相当多くの建物が更新時期を迎えるというふうに思います。例えば商業施設そのものの中に行政教育、先ほどお話しましたようなものが入っていたり、あるいは前回お話しした屋上とかテラス、こういったものが安心安全に配置されていて憩いの場を兼ね備えて、しかも快適に回遊できる建物。そういうものを全部入れようとすると当然今の床面積では足りないんですけれども、こうしたものに対するですね、先ほど隈先生からも建築基準法上のお話が第 1 部でもありましたが、こういったものをどういうふうに緩和していくのかという浦和なりの緩和のしかた、浦和ルールというようなものがあってもいいのかなというふうに思います。浦和ルールとしてはやはり賑わいとか安心安全、休日のお買い物で教育子育て、そして行政サービスこういうものが一体となって利便性のある商業施設またこれが必要な機能を集約してそこからもちろん歩いて住宅地に行くようなそういったまちづくり、上質な生活者のためのまちづくりというのを今後皆さんと一緒にな

って考えていきたいというふうに思います。ありがとうございます。

清水市長

ありがとうございます。それでは次にですね。JR 浦和駅長として、駅から地域の魅力発信に取り組まれている交通事業者の視点からご意見頂戴したいと思いますが、前回は住んでよかった、学んでよかった、働いてよかった、訪れてよかったと感じられるまちづくりを駅からも進めていこうというふうに考えているそうそういったご意見をいただきました。また駅は多くの方が利用するので多世代の交流、またコミュニティの強化に加え防災も大変重要だというようなご意見もいただいたところです。鳥羽委員からそれぞれ各テーマのコンセプトについてご意見を頂戴できればと思います。

鳥羽委員

第 55 代目で浦和駅長の鳥羽と申します。明治 16 年にですね、もう初代が出てからもう長い間鉄道を担ってきております。そういった意味で鉄道人としてですね、ちょっとこの場でお話をしたいと思っております。先日も地震がありました。当然電車は一斉に止まりました。そういったことからこれから先、いついかなる時にそういった大地震、または大規模な火災が起きるかわからない状況。そういったことで例えば時間帯によっては列車が駅間に止まれば 1000 人近くのお客様を降ろして安全な場所に誘導するといったことも行わなくてはなりません。そういった意味で駅をご利用されるお客様、または電車にご乗車されるお客様、また駅周辺にいる市民以外のお客様もたくさんいるわけなんですね。そういったお客様が避難先を求めて移動であったり、流動っていうのが当然行われると思います。その中では小さいお子様であったりご老人であったり慣れない学生であったりですね。または言葉の通じない外国の方もいらっしゃると思います。そういう意味で浦和のまちならば安全だ、と思われるようなですね、施設であったり、環境、例えば電力供給だとか通信の手段、食糧の提供、そういったことも含めてそういった確保が非常に必要かなと思っております。そういったことも含めながらですね、駅周辺の商店街であったりとかまち並みの散策もあるんですけれど、ウォーカブルという言葉が非常に先ほどから出ているんですけれど、まちでその歩道の幅そういったものを広くして楽々と歩きやすいまちづくりというのが非常に良いイメージの中では必要なのかなと思っております。また駅の弱みでもあり、これも強みなんですけれど不特定多数の人が非常に行き来しております。そういった中で駅の役割として今までの集う駅というのを、集うっていうんですか駅に用事があって来るっていう集う駅から、繋がる駅というものを目指してこれからですね、まちの魅力だとかそういった様々な情報発信をしていきたいと考えております。以上になります。

清水市長

はい、ありがとうございました。それではですね、ここで委員の皆さまの方から隈会長に何か聞きたいことがありましたらご意見頂戴をしたいと思いますがいかがでしょうか。時間

の関係でお一人ぐらいということで、それでは向井委員から早速手が上がりました。

向井委員

こういう図々しさ全開は素人がいいですよね。はい、今駅と駅の周りっていうことでこれまで話してきたんですけれども、これから30年後となるとこういろんな移動手段が出来てきて、自動運転のようなことがメインになってきて、それこそ一家に一台車を持つっていうよりも何世帯かでみんなで共通の移動手段を持ったりとかそういうことで自動運転だったり、もしかしたら空中飛んだとかそういうことがこれから起こると思うんですけれどもそれはこれまであった道を使えない移動方法なんじゃないかなと思うんですけれども、新しい道が出来たときに、その駅の役割とか今まで使っていたなじみのある動線っていうのはこれからまちの中でどのような役割を持っていくのかなっていうのを隈さんの頭の中でイメージなさっていることを伺いたいです。

隈会長

駅っていうのが19世紀の駅っていうのはまちにおいて非常に重要な顔だったんですね。よくパリとかね、ロンドンとか、こう天井の高いターミナル駅ってあるじゃないですか。それはもうまさにその時代の技術のトップだったし、それからその駅を中心としてその都市が開けていった。そういう駅が20世紀に一度こう元気なくなるんですね。それを自動車って言うことで元気がなくなってきて、駅っていうのは本当に通勤っていうための何か押し込められる場所っていう感じでね。どちらかというとその非常に輝かしいイメージからちょっとマイナス面に変わってきた。でも今もう一回その駅の部分っていうのが世界中で起こりつつあるんですね。それは今日も盛んに出ているウォーカブルなまち。それの起点としての駅、あるいはその場所の文化的なアイデンティティを象徴する場所としての駅、みたいな形でその中にもいろんな機能もこれから入ってくる。例えば今保育所みたいなものも駅って持たせようっていう動きがいろいろあるじゃないですか。やっぱりそういうものには駅っていうのは非常に可能性がある場所で、そういう駅で先程の駅長も防災の話をすごく強調されていたけれども、防災の機能っていうのもみんな地震の時も3.11の時もやっぱり駅にものすごい人が訪れてきて、それをどう風に処理するか。その時の避難のための食料の問題とかいろいろな問題が出てくる。そういうようなことが駅に期待がどんどんどんどん高まってきて、それがここのさいたまでも、浦和でも解けばいいか、そこがやっぱり変わらなきゃいけないと思いますね。駅の周りっていうのは。それに対して交通の手段というのは多分この３０年っていうのはかなりのことが起きますね。自動運転なんてまだ始まったばかりで、もうものすごい可能性は実は技術的にはあるんだけどまだ安全性の問題で実証実験の問題なんだけど、それも変わるだろうし、ドローンの問題もものすごくいろんなことで技術的には可能性があるんだけどまだ検証の段階。今ちょうど検証が始まったところなんで、そういうものがこの30年間に変わったときに何が起きるかっていうことをですね、やっぱ

り駅の周辺に一番面白いことが起きるんじゃないかっていうふうにも僕は感じているので、それを先ほどのデザインと技術ってものをうまく噛み合わせていくとそこに解決の道が見えてくるかなって気がしますね。

清水市長
はい、ありがとうございました。それではそろそろの時間となってきましたので、ここで委員の皆さんから浦和のまちのコンセプトについていろいろご意見を頂戴しましたけれども、それをお聞きになって浦和のまちのテーマとコンセプト全体について隈会長に少しまとめていただければと思います。よろしくお願いします。

隈会長
今回、この有識者懇話会の面白いところはやはりいろんな分野の方が入っているということが面白いと思いました。よく私はこのまちづくりのこういう委員会で呼ばれて話すんですけど、いわゆるまちづくりの専門家みたいな方が呼ばれることが多くて、今回みたいにいろいろな分野の方がこういう人選の会は非常に少ないんですね。多角的な視点で過ごす向井さん旅サラダ的な視点からですね、もう駅長さんからですね皆さんが多角的なそれぞれの、まちっていうのはやっぱ多角的に見ないといけないんですね。特にこのさいたま市、浦和っていうのはですね多角的な深さを持っている、いろんなものが複合している深さを持っているので多角的な視点で見るのがどうしても必要で、それにぴったりなメンバーが今日皆さん集まって、この後ろの廣瀬先生も安藤選手も含めてそういうものがここで交わされているってことは本当にさいたま市らしい、いいミックスができているなと思いました。今日の意見も私が今まで気付かなかったようなことを皆さんいろいろ出していただいて、こういう意見を上手い形で反映していくと本当に多角的なまちにふさわしい多角的な計画、そういう単純で薄っぺらい計画ではなくて深さのある計画っていうものが出来上がっていくというふうに感じております。今日の皆さんの意見を聞いてそういう何か直感といいますか、何か実感が湧いてきたという感じであります。

清水市長
はい、ありがとうございました。隈会長から浦和のまちのコンセプトについてまとめていただきました。かなり多分野、多角的なメンバーが揃っていて多角的な視点を持ったまちづくりをしていくことがさいたま市らしさに繋がっていくのではないか、こんなご意見を頂戴したところでございます。会議も終了の時刻となってまいりました。委員の皆さんからの様々なご意見を踏まえまして、個性と魅力を磨き上げながら 2050 年に世界で輝く浦和を目指して、今後も市民の皆さんからもご意見を伺いながらまちづくりビジョンの検討を進めてまいりたいというふうに思います。また隈会長からデザインあるいはデジタル。デザインは少し感性的な部分が強いかと思いますし、デジタルはむしろ科学的な部分だと思います

がそういった感性みたいな部分と科学というような部分の少し融合した視点であるとか、様々なヒントが各委員の皆さんからも沢山お寄せをいただきましたので、そういったことを踏まえながらさらに計画づくりを深めていきたいというふうに思っております。本日ご参会をいただきました委員の皆様本当にありがとうございました。また会場にお越しいただきました皆さんにも長時間にわたってご参会をいただきましてありがとうございます。以上をもちまして第 2 回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会を終了させていただきます。ありがとうございました。